

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3337714649

FAX(03)32299153667

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円

6ヵ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言

多くを教える安倍経済使節団

原野人……………2

原発輸出を「成長戦略」の根幹に

二層制から三層制へ

滝野 忠……………3

―首切り自由化 裏と表(下)―

デフレからの脱出は困難

伊勢 太郎……………5

―日銀「量・質両面の金融緩和」実態と現状―

岩見ヒサさんの活動で

照井 モト……………8

―岩手に原発がないのは偶然ではなかった―

〃機械が仕事を次々奪う〃

小林 晃……………11

―「ラッターイト」的機械観の蒸し返し―

原発ゼロめざし 三つの組織が協力

……………13

―六・二 NO NUKES DAY―

◇オキナワだより◇

毛利 孝雄……………13

卒業・卒論、そして近況

読者からのおたより……………14

# 旬刊 社会通信

NO. 1145

二〇一三年六月一日号

二〇一三年六月一日発行

(毎月一日・一五日二回発行)

## 多くを教える安倍経済使節団

原発輸出を「成長戦略」の根幹に

## 中東使節団の親分衆

連休中の安倍首相の中東訪問には、過去最大規模の経済使節団が同行した。経団連の米倉弘昌会長、国際協力銀行「JBIIC」の奥田碩総裁、三菱重工の宮永俊一社長、東芝の佐々木則夫社長をはじめ、独占資本の親分衆が率いる団である。

資本蓄積の法則としてグローバルゼーションが進んで、三菱を頂点とする独占資本が、いかに多くの国に支社や工場や合弁企業や買収子会社などをもつ多国籍企業になるうとも、独占資本でなくなるどころか、ますます巨大な独占資本となっている。しかも多国籍化した独占資本にとって、本籍国家の意義と役割は小さくなるどころか、激しい国際的競争の中で、ますます大きくなっている。このことを政財官のこの御一行ほどわかりやすく教えているものはない。

現在の国家は資本家階級が労働者階級を抑圧し支配するための機関であり、その国を本籍国家とする総資本のための、事実上は一握りの独占資本のための機関である。独占資本家階級は、本誌でも明らかにされているように、全人口の〇・一%にも満たない(〇・〇五五%程度の)存在であるが、大部分の剰余価値を独占利潤として吸収(搾取)している。彼等は国家を武器として、癒着・一体化しながら最大限有効に活用する。国内外からの独占利潤の実現と、マフィアの如き独占資本が支配し続けるためには、何でもする国家である。いよいよあらゆる国家独占資本主義となつて、労働者階級が闘い、打ち倒すべき相手として極めて分りやすくなっている。

## なぜ石油埋蔵量世界一の国にまで

円安推進による輸入産品の値上がりとインフレ政策とで庶民を犠牲にしながら、独占資本の輸出を拡大しようとする。武器輸出の規制緩和もしながら、原発の輸出拡大はマフィアにとって最も魅力的な商売である。一基地に二機で一兆円超、四機で二兆円超の設備輸出となる。

独占資本家たちにとって、商売さえできれば、どこの国でいかに悲惨な大事故が起ころうが、たいしたことではない。東京海上火災(三菱)や三井住友等の損害保険会社は初めから逃げていた国内の原発災害に対して、国家が前面に出て国民の血税で東電等を救済することはすでに実証されている。もともと、労働者や農漁民や小経営者にたいする救済や賠償はきわめて安価にされてしまっているが。輸出国と輸入国の責任・賠償の分担割合も明らかにされてはいないが。

人間の命の上に利潤をおくマフィアの如き死の商人にとって、福島事故はむしろ売りに活かせる。あの事故によって世界一安全な原発に改良できるから買いなさいと。サウジアラビアやアラブ首長国連邦(UAE)やトルコやインドやベトナム等の民衆にとってはいい迷惑である。日本産の原発が大事故を起こせば、最も被害を受ける

のはその国の民衆である。直接被害を受けない人たちも、輸入国として血税で負担を強いられる。日本からも血税が送られるだけで、マフィアはここでも責任を逃れる。

サウジアラビアの石油埋蔵量は世界一であり、二位のイラクの二倍もある。UAEも世界第六位を誇る。石油やガスが売れるほどあるこれらの諸国に、本当は原発などまったく不要である。しかし日本の独占資本にとって、ここでも大きな商売をしたい。一組で一兆円を超える原発を売り込むほど、もうかる商売はない。建設費のたった1%を「袖の下」に使っても一〇〇億円である。各国の権力者たちに原発建設計画を作らせながら、売り込むのは容易なことである。表からは国家も「支援金」を出す。

原発輸出等をテコにして、独占資本を更にいかに成長させるかの戦略を描く安倍晋三首相は、実に忠実な政治部長である。

「ホルムズ海峡の安全保障」のためには、国防軍も送り込み、武器も自由に輸出できると、改憲のために健闘してきたのは渡邊恒雄教官部長である。両部長は共同して長嶋君や松井君までも利用する。

鉄道や上下水道などのインフラとともに、大規模な商売になりそうだからと、核兵器を生産するインドにまで原発を売り込んでいる。ここには天皇まで利用される。

近く安倍使節団は東欧諸国にも出かけるという。

使用済み核燃料や高レベル廃棄物をどう処理・処分するかなどは、国内でさえ決めることができないまま五四基も造ってしまった独占資本のこと、他国には輸出さえできれば、そんな問題はとるにたらないことである。

(原野人)

## 一一層制から三層制へ

―首切り自由化 裏と表(下)―

**生産性向上** 資本の社会的責任は貨殖、価値増殖です。新しい価値は労働が生みます。ですから、資本の本能は価値の源泉である労働力をどれほど安く買ったか、法定の労働時間を超えてどれほど長く労働させるか、一分一秒であっても労働者を休ませることなく、価値を生む労働として支配するかに収れんさせられてゆきます。

生産力、そして高等教育の発展とともに労働生産過程は変化しつづけます。生産力の発展は機械を人間にとりかえ、労働力への需要は減少します。そればかりか、情報・技術革命は長期の教育と訓練でしか得られなかった熟練労働をボタン操作一つの単純労働に変えてしまいました。コンピュータが労働生産過程、そして労働のあり方にどんな大きな革命的变化をおよぼしたか、また及ぼし続けているかは職場労働者ならだれでもが日々体験、学習、強制させられていることです。生産性向上、生産力の発展は、資本主義下にあつては、かならず資本の生産性向上としておこなわれ、労働者の労働条件、生活向上のためではないのです。

機械にとって代わられた労働力は社会に幾層にも沈殿させられます。資本は己の価値を増殖させてくれる可能性が一番高い労働力を求めます。労働者は労働力を売って生活手段を得る他、生活の術をもちませんから、労働者間の競争は激しくなります。

資本は競争に勝たねばならんとドラ声を張り上げ、彼らの政策を自民党に要求しま

す。自民党は個々の独占資本、それらの利益集団である日本経団連の利益擁護に邁進します。これは第二次世界大戦後一貫して続いてきたことで、小泉や安倍に始まったことではありません。

**労働者代表は排除** 今の特徴は安倍を議長とする産業競争力会議、規制改革会議で、資本が何の制限を受けることのない、資本が自由自在にふるまえる労働制度に着手していることです。安倍は第一回規制改革会議で「民間企業が最も魅力を感じる環境を提供する国を目指したい。目指すのは世界一だ」と、財界に見得を切って見せました。

世界大競争はさらに激しく、少子化は進行し、産業構造は変化する。そのなかでどう競争力を強化するか。財界は自民に搾取強化の自由化を求めたのです。規制改革会議、産業競争力会議は首相を中心とする閣僚と財界人、財界人から剰余価値の分け前をくすねとることを業とする学者というより資本の茶坊主だけで構成される。そこには「労働者代表」は一人も招かれておりません。

**不都合な輩はクビを切る** そんな中、密室で話されることが、長谷川閑史氏（武田薬品社長）が第四回産業競争力会議に提出した雇用制度改革案。その中身は「雇用維持型の解雇ルールを世界標準の労働移動型ルールに転換するため、再就職支援金、最終的な金銭解決を含め、解雇の手続きを労働契約法で明確に規定せよ」。それは――

(1)民法六二七条には「雇用に期間の定めがなければ各当事者はいつでも解約の申し入れをすることができ、申し入れ後二週間の経過によって雇用は終了する」とある。この民法六二七条に明記されている解雇事由の原則を労働契約法にも明記し、どういふ場合には解雇を禁止するか、あるいは解雇の際に労働者にどういふ配慮をすべきか、といった規定を明文で設けるべき。

(2)判例に基づく解雇乱用法理による解雇ルール（労働契約法第一六条）を見直す。その際、若手・中堅世代の雇用を増やすために、例えば、解雇人数分の半分以上を二〇代―四〇代の外部から採用することを要件付与する等も検討すべき。

労働契約法一六条は「解雇は、客観的に合理的な理由を欠き、社会通念上相当であると認められない場合は、その権利を濫用したものとして、無効とする」と定めている。この条項をとつ払い自由に首切り出来る仕組みをつくれということです。

これをだれにもわかる言葉で発言したのが三月一五日の産業競争力会議メンバーのロンドン社長。「勤務態度が著しく悪く、または結果を著しく出していない社員は他の社員に迷惑をかけていることを十分認識しなくてはいけない。迷惑をかけている人に対して解雇が会社としてしやすくなる柔軟な要件を入れるなど、ぜひ検討していただきたい」と。

厚生労働省は、こんな資本の主張に整理解雇四要件は最高裁判所の既定の事実、これをひっくり返すことは「期待権を著しく侵害」するから大きな混乱を招く、今重要なのは正社員、非正社員の二極化解消すること。それには雇用形態にかかわらず、安心して生活できる多様な働き方が必要と、「多様な」働き方を提示する。

それは正社員と非正規労働者間に「多様な働き方」、①勤務地限定正社員、②職務、職種限定正社員、③短時間正社員、④専門型派遣等の「準正社員」を制度化したい。

# デフレからの脱出は困難

―日銀「量・質両面の金融緩和」実態と現状―

## 独占資本のために

安倍政権が猪のように突き進む経済政策―金融・財政・成長戦略―はだれのためのものか。「独占資本の独占資本による独占資本のための政治」の実行・実践である。

独占資本の「利益集団」日本経団連（会員は企業会員一四九二、団体会員一七一、特別会員二九の一四九八で構成）は昨年十二月十六日、安倍内閣に「当面の重点政策」を突きつけた。要求は「成長促進的な経済政策実行」、大きく六つである。

第一、円が高すぎる。輸出は伸びず日本経済は細る一方だから、政府・日銀が一体となってあらゆる手段を講じ、着実な円高是正をはかれ、

第二、「国益」は民間大企業が世界大競争の勝者となって、実現される。それにむけた「国家体制」が自由貿易のてつてい的推進だ。TPPとともにアジア太平洋自由貿易圏（FTAAP）に向けた主導的な役割を果たせ、

第三、環境・エネルギー政策への規制が強すぎる。電力は産業・企業の存続に不可欠だから、原子力を含む多様なエネルギー源の維持の観点に立ち、ゼロベースで見直せ、第四、「柔軟な労働市場」を再構築し、「多様な」就業機会を創出するには、労働者の首を切り易い体制をつくる必要がある。雇用規制を見直せ、

第五、法人税を安くする、国・地方をあわせた法人実効税率をアジア近隣諸国並みの二十五%まで引き下げる、

## 約束

安倍は経団連の円高是正要請に答えるため、白川日銀総裁の首を切った。新総裁の黒田は「物価上昇率二%のインフレ目標を二年目途に早期達成をめざす」、金利中心の金融政策を「量・質両面無期限の金融緩和」に転換した。金融問題は実務にかかわる者の他は遠い存在だ。「二本の矢」、「アベノミクス」そして「量的・質的金融緩和」はオバケのように実態は見えず、言葉だけが飛び交っている。ちょうど机が足で立っているのではなく、頭で立っているようである。

「量的・質的緩和」とはなにか。「これまでと量と質の面で次元がちがう」と、黒田が自画自賛する金融政策の実態はなにか。読売新聞は重大な政治的局面で世論誘導を目的に大きなインタビュー記事、さらに読売国際懇談会で時の人に語らせる。自民党は自由新報という機関紙をもつ。だが党員すら読むことがないそんな代物だ。読売新聞はそんな宣伝媒体物しかもたない自民党の実質的機関紙だ。

読売国際経済懇談会は四月十二日、黒田総裁の講演会をおこなった。読売（四月一三日付）にみる。黒田は「これまでと次元がちがう」について、「期待を抜本的に変える」こと、「デフレ期待の払拭」とこう語る。

「日銀はこれまでもゼロ金利や量的緩和、包括緩和など様々な金融緩和を行ってきた。しかし、こうした政策の積み重ねによってもなかなか結果が出なかった。

私は戦力の逐次投入は採らずに、日銀の持つすべての力を一挙に動員することが必要だと強く思っていた。今回導入した『量的・質的緩和』は、量と質の両面でこれまでとは次元の違う金融政策だ。まず、消費者物価の前年比上昇率2%のインフレ（物価上昇率）目標を、二年程度を念頭に置いてできるだけ早期に実現すると明確に表明した。日銀の強い姿勢を市場や企業、家計にわかりやすく伝え、期待を抜本的に変える。

『強いコミットメント（約束）』と『わかりやすい説明』を通じて、人々のデフレ期待（物価が下がり続けるという予想）を払拭していくことが必要だ。」

日銀はみなさん（独占資本そして投機屋）に以上のことを約束するというわけだ。

### 量・質両面の金融緩和

約束はどのように実行されるのか。それが『量・質両面の金融緩和だ』とつづける。

「具体的には金融市場調節の操作目標を『金利』からマネタリーベースという『量』に変更した。マネタリーベースを年間約六〇兆〜七〇兆円のペースで増加させて、昨年末の一三八兆円から二年間で二七〇兆円と二倍にする。

質の面では、国債の買い入れ対象を四〇年債を含めてすべてのゾーンの国債に拡大した上で、買い入れた国債の平均残存期間を現状の三年弱から国債残高の平均並みの七年程度に延長する。これまでのように短めの金利だけでなく、全体の金利低下を促すことにより、経済・物価への働きかけを強めていくためだ。」

金融市場にお金をどどん流し込む、そして二年間で約二倍の二七〇兆円にするというのだ。日銀は発行される国債の七〇%を引き受けるとも。金融、そして投資ファンドの狐どもは国債価格は上がる。絶対に損することはないと国債市場に群れ集う。さらに日銀は米国の経済規模の三分の一の市場に、米国以上にお金・円を垂れ流す。円は売りだと円安が進む。量的緩和の現状である。

「質的緩和」とはなにか。大きく三つが上げられる。一つは国債の買い入れ対象をそれまでの短期国債（償還までの期限が二年未満）だけでなく、超長期国債（償還までの期限が一年以上）に拡大したこと、二つは資産価格に働きかけるため上場投資信託、不動産投資信託を年間一兆と三〇〇億円のペースで買い増していくこと、三つは金融緩和への本気度を市場に伝えるため制度を単純にしたことである。

これら三つの「質的緩和」の目的はなにか。全体の金利低下、投機のすすめ、量的緩和を続けることでお金の流れを促したいというものだ。

投資信託は投資より投機である。不動産投信の市場規模は四・六兆円、上場投信は七・四九兆円とある。小さな市場だ。その市場に日銀が買いに入る。需要と供給の法則がこわれる。こわされた結果はごく限られた投資家のバブルである。

### 「脱デフレ」

黒田、そして自民党政権は「量・質緩和」でなにをめざすのか。「脱デフレ」が強調される。具体的には次のようにだ。

「金融緩和の効果は主に三つの経路を通じて経済や物価に波及すると想定している。第一に、長期国債やETF（上場投資信託）を買い入れることで、長めの金利の低下を促す。これによって、資金調進のコストが低下し、企業などの資金需要が高まる。

第二に、日銀が長期国債を大量に買い入れることで（長期金利の低下が見込まれ）、これま

で長期国債の運用を行っていた投資家や金融機関が、株式や外債などリスク資産へ運用を移行させたり、(企業や家計への)貸し出しを増やすことが期待される。

第三に、インフレ目標の早期実現を約束し、次元の違う金融緩和を継続することで、市場や経済主体の「期待」を抜本的に転換する効果が考えられる。予想物価上昇率が上がれば、実質金利の低下などを通じ、民間需要を刺激することも期待できる。」

ここに言われていることはこうである。

一、金利が下がって、企業や消費者はお金を借りやすくなる。

二、企業や個人にお金が始めて、工場を増設して新しい製品を作ろうという意欲が始めたり、住宅ローンを組んで家を建てようとする動きが期待できる。

三、さらにお金の量が増えたと、将来、物価が上がるだろうと国民が思い始め、住宅や自動車などをはやめに買うかもしれない。

四、こうした経路でお金が出れば物価が下落し続けるデフレから抜け出せる。

「デフレ」脱却「経済回復」への「期待」だけで本当にデフレは克服できるのか。

デフレとはなにか。一九九七年以来ダラダラと続く慢性的不況の本質はなにか、出発点はここにある。過剰生産による需要と供給の乖離である。政府統計ですら供給過剰は三・一%、一五兆円という。

## 現状

今、なにが起きているか。まず円安である。安倍の五ヶ月で八三円から一〇三円台へと二〇%下がった。「GDPが日本の三倍の規模の米国に追いつくペースで日銀が資金供給をふやしつづけるのだから円安は必至」と円は下がる。また官民ファンドで外国債購入もとの観測は円売り、円安への「期待」を助ける。

株高である。円安は日本の基幹産業の輸出をふやすと、自動車、電機株が上がった。八〇〇〇円台から一万五〇〇〇円台への日経平均の上昇は「今なら損することはない」と取引を熱狂させる。

投機熱の高まりである。円はさらに下がる、株価は上がる。とくに市場規模が小さい投信への日銀の介入は経済法則の需要と供給の均衡をくずす。

国債市場での異変である。この市場でも需給バランスがくずれ、「国債で損することはない」と国債価格が上昇する。他方、長期金利は下がる。ところが、金利が乱高下し始めた。はやくも長期金利の下方安定の目論見、期待がくずれたのだ。

長期金利低下は金融機関の資金運用にも影響を与える。ゼロ金利下、金融機関は国債売買と利子で資金を運用してきた。生保四三社は三三二兆円もの資産をもち、国債で一四六兆円を運用する。債権バブルⅡ財政規律のゆるみへの警戒感の運用先を国債から海外資産に変える。ここでも投機である。

デフレの本質はよくいわれる過少消費ではない。さきにもふれたが、日本のデフレの本質は慢性的過剰生産の結果である。

投機は富裕者の所得を増やす。ぜいたく品は売れる。しかし、労働者賃金はたたかってこそふえる。大衆消費財は過剰のまま、しかも円安で物価は上がる。(伊勢 太郎)

## 岩見ヒサさんらの活動で

―岩手に原発がないのは偶然ではなかった―

岩手県南「一関市」の遠藤さんと沿岸「釜石」の私が、野村胡堂・あらえびす記念館のある講座で知り合って二年。昨年一〇月、私の「チエルノブイリ視察報告」を熱心に聞いてくれた遠藤さん。この三月の講座を最後に離ればなれになった時、お世話になったお返しにと、岩見ヒサさんの「原発反対奮闘記」の部分をコピーし送ってくれた。遠藤さんご自身の左記のようなブログも添えて。

**恥ずかしい** 「二年前の『大津波』の映画、『百年後の未来へ―三・一一保健師達の証言―』を作成中の北上市都鳥拓也・仲也兄弟から、東北六県太平洋側で『原発』がないのは岩手県だけだ、と教わった。青森県には東通原発、宮城県には女川原発、福島県には福島第一原発、福島第二原発があることは知っていたのに岩手県だけには『原発』がないのか、などと考えることがなかった。恥ずかしい。

**岩見ヒサさん** それには、元開拓保健婦さんの働きがあったということも教えてくれた。都鳥ご兄弟が作成中の映画には、岩見ヒサさんのインタビューも入るとのこと。

その岩見ヒサさんの著書『吾（わ）が住（す）み処（じょ）ここより外（ほか）になし―田野畑村元開拓保健婦のあゆみ』（萌文社 一四三頁 一〇五〇円―税含）を、図書館から借りて読んだ。

開拓保健婦の岩見ヒサさんは、大阪府の現・枚方（ひらかた）市で一九一七年に生まれた。最初の結婚相手は肺結核で病死したが、その方の実家が岩手県の種市町だった。ヒサさんが再婚したのは、田野畑村の岩見対山さんという和尚さん。

看護婦と助産婦と養護教諭の資格を取得していたヒサさんは、中学校で養護教諭を勤めた後、盛岡の保健婦専門学校に入学して、保健婦の免許も取得した。子育てをしながら、開拓保健婦をしていた。退職してからは、育成してきた婦人会の人たちに推されて、村の婦人団体連絡協議会の会長になっていた。

**反対運動** 一九八一年、田野畑村明戸地区に原発施設が作られる：らしいと知ったヒサさんは、アメリカのスリーマイル島の原発事故や敦賀原発の放射能漏れ事故なども知っており、じっとしておれなくなった。ヒサさんは『原発とは何か』五〇冊を取り寄せて村会議員たちに配った。『村婦協』の臨時役員会を開いて、『原発とは何か』を説明したという。漁協や農協の役員達にも四〇冊も追加注文して配布した。（筆者注、書名『原子力発電とはなにか、そのわかりやすい説明』 広瀬隆著 野草社）。

年が明けて、県の社会党議員が講師を伴って田野畑村の『羅賀荘』に講演に來られたとき、ヒサさんは、『たくさん出席してもらいたく、婦人会員はもちろん、漁業従事者にも連絡をとった。講演内容は『原子力発電とはなにか、そのわかりやすい説明』とほとんど同じで、受講者数は一〇〇人位でまずまずの集まりだった。農業を営む明戸地区からは全世帯出席。しかし、驚いたことは、公務員はもちろん、公務員を夫に持つ婦人会員は一名も参加しなかったことだった』と、当時の様子を綴っている。



岩手に原発がないのは、偶然ではなかったのです。環境庁も「国立公園の中に原発は作らせない」という。知事はそれでもなお推進の姿勢のようであったそう。村長さんも反対する。婦人団体や漁民たちの熱心な運動がおこる。そしてついに田野畑村は、原発建設を封じることができたのだった。

同じ時期に、青森県では、知事も六ヶ所村の村長も賛成したために、核燃料再処理工場が建設されることになってしまった。私はこのころ下北にいた。当然ニュースで知っていたはず。なのに、なにもしなかった。原発の本は買って読んでいたのに。

現在岩見ヒサさんは九六歳？九五歳？ヒサさんが田野畑村にはじめて来た時に詠んだのが『吾が住み処ここより外になしと思ふ 大気清澄にして微塵とどめず』

これが、ヒサさんの著書の題名にもなったのであった。この本は福島事故の前年に刊行。本のタイトルだけでは、原発との関係が全くわからないのに、盛岡市内の書店で平積にされて、さらに『なぜ岩手県に原発が無いのか』と宣伝メモがあったという。一一八頁から、一〇頁にわたりこの『原発反対奮闘記』は書かれている。一〇頁だけなので、そこだけでも読んでほしい、と私は思う。地形をみる。もし、ここに原発が建設されていたら、平坦な地形にあった福島よりも、さらに重大な事態を招いたことは間違いないような。(後略) どうか どうか読んでください。」

**懐かしい田野畑村** 早速、岩見ヒサさんの本を読みたいと、市の図書館に尋ねたり、本屋に注文したりしたが、何日も経って、「取次店には今ないそうです。」の電話にがっかり。川越の息子に頼んだら、アマゾンからすぐ届いた。

初めて訪れた岩見ヒサさんが、「吾が住み処ここより外になし」と詠われた田野畑村。私も昭和三三年大学三年の夏休み、教職科の僻地研修旅行で田野畑村や普代村田老町の学校を訪問した時のことが、つい昨日のことのように懐かしく思い出された。あんなにたっぷりの生うにや、こりこりのあわびをこちそうになったのは、生まれて初めての経験だった。

早朝の海岸散歩の爽快感や、本校は勿論のこと、全ての分校を回ったときの空気のおいしかったこと。子ども達や地域の方々の温かさにふれて、心が和み、愛着を感じている自分を見抜いたかのように、田野畑村の教育長さんが、懇親会の席で、「多田さん、田野畑に来て下さい。」と懇願された。

だが、私は翌年の教員採用試験の面接で、「どこでもいいですね。」と言われた時、「いいえ、僻地はいやです。僻地には教育以前の問題がいっぱいあります。私如き青二才がいく所ではありません。僻地には、経験豊富な円熟した教師がいくべきです。」と答えた。試験官は驚いて、「就職したさに、『どこでもいいです。』と答える学生が多いのに、珍しいですねえ。」と目を丸くしていた。

「六三歳ヤマトンチュの沖大生」毛利孝雄さんが、「原点は、岩手県岩泉町という山間僻地で、二〇歳の冬四ヶ月間ここで代用教員を務め、一年から六年まで二〇人の分校の子どもたちと親の農民に見たのは、貧困と差別の現実だった。」と本誌四月一五日号(No.1142)で述べていた。私も田野畑と同じように「日本のチベット」と言われていた岩泉安家地区へも、研修旅行で回った。

**原発反対、合成洗剤追放** 田野畑村の明戸地区が、原子力発電所建設の候補地として上げられたのは、昭和五六年（一九八一年）一二月の定例県議会だったそうだ。昭和五〇年（一九七五年）に田老町接待地区に、電源開発株式会社が原子力発電所を作ろうとしたが、地区漁民が反対して中止したことがあったという。私も閉山した釜石鉱山の構内に、原子力の施設（高レベル廃棄物処分地候補）を作る話が持ち上がった時には反対したが、他の事は全く知らなかった。当時既に全国の原子力発電所は建設中のものを加えて三八基もあったなんて。

一九七〇年代私は、子どもたちの健康と未来を守るため、合成洗剤追放運動で飛び回っていた。河川や下水処理場が洗剤の泡で覆われ「飲み水も危ない」と「きれいな水といのちを守る合成洗剤追放全国連絡会」結成。第一回全国集会には当時小学生だった長男の自由研究「金魚の実験（合成洗剤では即死）」を携え参加した。岩手県内六〇〇人が集まる県漁連婦人部の定期大会には、花巻温泉に三年連続で講演に招かれた。ヒサさんは、村の急激な洗濯機の普及で合成洗剤を多量に海に流すことで、アワビやウニなどの磯漁が不振になったのではないか。「自分たちの健康と、川や海の水質を守るため主婦は一致団結し、合成洗剤追放運動を行うべき」と、活動を活発化した。めざめた婦人たちは、「原発の交付金が入れば学校も病院も大きいのが建つし職場も確保できる」という大方の男たちを変えた。廃炉・再稼働をめぐり揺れている、立派な街並みの東海村を二度訪れた私は、岩見ヒサさんの田野畑村に学びたいと思った。岩見ヒサさんにお会いしたい願いがこの五月末に叶う。「私もお会いしたいです。」と、優しく上品に、都合のよい日を教えてくださいました。『三陸大津波』の著者、吉村昭が大好きで田野畑村に毎年会いにいらしていた方を尋ねると、「早野仙平村長さんだと思います。」と教えてくださった。

**東海村にも** 去る五月一四日、東海第二原発の再稼働中止・廃炉などの請願を不採択とした東海村議会原子力問題調査特別委員会終了後、再稼働を容認している鈴木昇議員が「廃炉を求める村民は過半数に達していないと思う。」と述べたという東京新聞の記事を読んで、「村民をなめないで！」と叫びたくなった。無医村で住民の命を守り、命をつなげる活動をしてきた岩見ヒサさんの保健師活動が、田野畑村の住民だけではない、日本を含む世界中の人々の命を救った尊い運動だったとつくづく思う。

東海村にも、ヒサさんのように、わが村東海村をこよなく愛する村民が大勢いらっしやる。チューリップやスマイルなど色とりどりの花が咲き誇るご自宅の庭を案内してくれた友人川野弘子さんもその一人だ。日夜、脱原発運動に明け暮れる彼女が雑草一本生やさず手入れしている自慢の庭だ。「福島の人にはこれがなくなっちゃったんだよね」としみじみ語っていた。子どもたちの健康と未来を心配し、奮闘されている東海村と周辺自治体の若いお母さんたちのエネルギーもすごい。大きな集会を何度も成功させ、村議会に請願書を提出し、傍聴活動も気を抜かない。今回は全村議会議員宛に公開質問状を発し、その結果としていいなコメントを書き添えた冊子を全戸配布した。

我欲を捨てて、子孫のために立ち上がった方々が、未来を見据えて頑張っておられる村上村長さんを力強く支えて下さることと確信している。（釜石市・照井 モト）

## “機械が仕事を次々奪う”

—「ラッダイト」的機械観の蒸し返し—

### 一

囲碁、将棋に、さして興味や関心のない人には、見逃されたかもしれないが、将棋の現役プロ棋士が、コンピュータソフトに、公式の場で、史上初めて敗れたというニュースは、“IT革命”の凄まじさを改めて象徴する“事件”であった。

将棋の現役プロ棋士五人と五つのソフトが、団体戦形式で戦われ（三月三〇日〜四月二〇日）、その第2局でプロ四段が始めてソフトに敗北し、最終第5局では、A級棋士の八段も完敗し、結局、ソフト側の3勝1敗1分けとなった。

知的スポーツの三大種目といわれる囲碁、将棋、チェスのうち、チェスはすでに一九九七年に当時の世界王者がソフトに敗れ、残るは囲碁のみといったところだが、この方のソフトの実力も、すでにアマ最強の六段レベルに達しているという（石田芳夫九段・談）。

### 二

だが問題は、ここから後の話である。

史上初の敗北を論評した記事（「朝日」、四月一六日）のなかで、話を社会・経済一般にまで敷衍（ふえん）して、『機械との競争』の見解を肯定的に紹介しつつ、次のように結んでいるからである。

「機械に敗れ傷つくのは、知らず知らず『近代のわな』にはまっていたということか。

つい陰鬱（いんうつ）になってしまう理由は、経済的な観点からも見えてくる。ブリニオルフソンらによる話題の書『機械との競争』は、世界的に失業者があふれる傾向なのは『人間が機械との競争に負けているから』と分析する。

機械が仕事を次々に奪う。残るのは、画期的なアイデアを出す経営者や作曲家ら創造的な仕事か、接客業など一部の肉体的労働だと同書は冷酷に指摘する。新聞記者も例外ではなく、データ中心の定型記事は既に機械による記事化がかなりのレベルにあるという。

さてこの記事は？」。

### 三

この記事の機械観は、事実上、「ラッダイト」的機械観の反動的な蒸し返しである。ここで“反動的”というのは、「ラッダイト」が「機械が仕事を次々奪う」と怒って、機械を大量破壊したのは、今から二世紀も前、道具に替わって機械なるものが史上初めて登場した時代の話だからである。

だから、マルクスは『資本論』で、こう述べている。

「一九世紀の初めの一五年間にイギリスの工業地方で行われた機械の大量破壊は、

機械破壊者（ラツダイト）運動の名のもとに、反ジャコバン派政府に、極度に反動的な弾圧手段をとる口実を与えた。労働者が機械装置を、その資本主義的使用から區別し、したがって、彼の攻撃を物的生産手段そのものから、その社会的搾取形態に転ずることを知るまでには、時間と経験とが必要だったのである。（文庫本二、四一七頁）。

機械は、個別的にか、あるいは全社会的にか、財貨・サービスの生産に必要な総労働時間を、たとえば半減し、その分、自由に活用できる余裕な時間を拡大する。必然的に「仕事を奪う」わけではない。「仕事を奪う」「失業者があふれる」のは、機械の資本主義的使用（搾取の手段として）が、各人の労働時間を半減するかわりに、人間そのものを半減する（首切り）からである。

「それ自体として見られた（社会主義的に使用されれば、と読みかえてもよい）機械装置は、労働時間を短縮するが、資本主義的に使用されれば、労働日を延長し、それ自体としては労働を軽減するが、資本主義的に使用されれば、労働の強度を高め、それ自体としては自然力にたいする人間の勝利であるが、資本主義的に使用されれば、自然力によって人間を屈服し、それ自体としては生産者の富を増すが、資本主義的に使用されれば生産者を貧民化する」（同上、四三八頁）。

#### 四

上掲の評論記事の記者および上司たちは、恐らく、『資本論』を読んだこともないのは疎（おろ）か、触ったこともなく、大学を卒業し、入社したに違いない。

小生が学生時代を送った一九五〇年代後半の九大経済学部では、経済学原論の担当教授が向坂逸郎先生で、講義もゼミも『資本論』であった。近代経済学（広義のブルジョア経済学）の原論担当の二人以外は、労農派系か、講座派系か、その他かは別として、各種専門科目の担当者は、すべて『資本論』を多かれ少なかれ理論的ベースとする学者であった。

その後も経済学原論は、ほとんどの総合大学で、マル経と近経の二本立て（どちらか選択）であったが、一九七〇年代の後半頃から、雲行きが怪しくなり始め、今日では、多くの大学で、同じ近経のマクロ経済学とミクロ経済学の二本立てと成り果てている。なお、東大のマル経・経済学原論は、早くから宇野弘蔵「原理論」（『経済原論』）で、『資本論』は、そのための参考文献の一つとしての位置しか占めていない。

「最高学府」たる大学の、こうした現状を考えれば、先の記者たちが、事実上、「ラツダイト」的な発想に落ち入るのも無理もない話ではある。機械と人間を直接対置して、その使用形態すなわち資本主義的使用か社会主義的使用かを無視する発想は、現行資本主義的発想でもある。『資本論』、ならびに『資本論』を基軸とする科学的な社会・歴史観（理論）の学習、研究、普及は、種々な形の、種々な流儀の「寺子屋」式でしか、当分の間は不可能なようにも思える。マルクス経済学すなわち『資本論』が、大学の講座において、経済学原論としての従来の地位を復活するには、多少時間が掛かるであろう。

しかし、それでも何ら悲観するには及ばない。『資本論』の理論と論証の基本的正しさは、現代資本主義（国家独占資本主義）の矛盾の噴出によって、ますます具体的

に実証されているからである。また、正しい理論は、社会・歴史科学、自然科学を問わず、必ず最後に勝利することを、これまでの歴史が幾度となく証明しているからである。  
(経済学者 小林 晃)

## 原発ゼロめざし 三つの組織が協力

— 六・二 NO NUKES DAY —

福島第一原発爆発から二年。巻頭言にあるように、原子力マフィアに反省はいっさいない。どのように原発再稼働と原発輸出をふくむ新設をやめさせるか。沖縄のようにである。沖縄の県知事はじめ首長は日米安保条約、そして沖縄基地に賛成だ。しかし、彼らは「賛成」の声をあげられない。沖縄県民が彼らを「包囲」しているからだ。

原発でもこれと同じ構図をつくる他ない。原発再稼働・新設反対の運動は全国で幅広く拡大している。国民の七割が「原発廃止」を望んでいることは、各種世論調査でも明らかだ。こんな時、反・脱原発の運動を一つに、大きな集会「六・二 NO NUKES DAY」が六月二日、東京で行われる。

反・脱原発をとり組む組織は①大江健三郎氏ら九人が呼びかける「さよなら原発一〇〇〇万人アクション」(二〇一一年六月)、②労働組合の全労連を中心に共産党系の三七組織で構成される「原発をなくす全国連絡会」(二〇一一年一月)、③首都圏でのグループ、個人の連絡網で毎週金曜日に官邸前デモを展開する「首都圏反原発連合」(二〇一一年九月)が原発ゼロへ力を合わせる。

集会は多様かつ重層的、「一〇〇〇万人アクション」は芝公園(午後一時〜午後二時四五分)、「全国連絡会」は明治公園(午前十一時〜午後二時)から集会そしてデモ、この二つは「反原発連合」が国会前でおこなう「反原発 国会大包围」に合流する。

### ◇ オキナワだより ◇

## 卒業・卒論、そして近況

「オキナワだより」も書かなくてはと思いつつ、忙しさにかまけてしまっています。六月一日に沖縄大学創立五五年シンポジウムがあり、そこまでは残れないかということになり、六月一日にこちらを整理して発つことにしました。

二年間の一応のまとめに近い「卒論」は、三〇〇部を印刷しましたが足りなくなり、一部加筆して二〇〇部を増刷しました。たくさんの方から感想をいただき、とくに普天間ゲートに集う皆さんから多くの声をかけられたことは思いもありませんでした。やっとなさんの気持ちに少し近づけたかな、という感慨をいだかせていただきました。一つだけ紹介します。

〇さん、私より一回り年上です。昨年九月末のゲート封鎖行動から、ほぼ休まず早朝の抗議活動に参加しています。英語が堪能で、いつも羨ましく思っていました。抗議行動ですから、普段はそう言葉交わすことはないのですが、過日冗談交じりに声をかけてくれて、言葉交わしました。「あんたの書いた卒論、毎日寝る前に少しづつ読んでよー。なんか一つひとつ言葉が重たくてよー、寝付かれないで朝起きるのが辛いよー」そして、次の週にはこんな話になりました。

「渡りたい人がいるんで、もう一冊もらえんかなー」という話からはじまって、「実はよー、自分も愛楽園(名護市の屋我地島にある国立ハンセン病療養所)の世話になったひとりでさ。中学の時ハンセン病発症して、軽かったんだけど最初は沖縄におれなくて多磨・全生園に入った。ヤマトに逃げたわけさね。退院して沖縄に戻ってからも二度発症して、この時は愛楽園に世話になって入院を繰り返した。まだ友だちも残ってるよ。高校進学も大変だったよ、何年もかかったから。あん

たの本読んでもとよ、なんか自分のこと書いてもらったように思うんだよねー。秘密にしているわけではないけど、積極的にカミングアウトしてるわけでもなかったから、書いてくれてありがとねー返す言葉は見つからなかったけれど、胸の内からこみ上げてくるものを押さえることができた。そして、ひとつもう取り返しのないことにも向き合うことになりました。

「あなたが話聞いた、知花重雄さんよー。今年初めに急に容態が悪くなって、亡くなったってよ」近く愛楽園を訪ねて渡せるよう、封筒に用意していたのですが、お線香と共に届けることになってしまいました。「集団自決」体験についてお聞きした渡嘉敷島のお嶺正雄さんには、三月二八日の渡嘉敷島慰霊祭に伺った際、直接お渡しすることができました。そんなこともあって、週三回午前六時から一〇時までが普天間基地の大山ゲートと野嵩ゲートに通っています。

学生たちとは、安倍政権の誕生の時に始めた「憲法学習会」を続けています。現在は週一回ペースでシロタ・ゴードンさんの『一九四五年のクリスマス』を読んでいます。もう一つ、エンゲルス『空想より科学へ』の学習会を、週一回私の家で行っています。こちらは毎回私がレポーターなので四苦八苦しています。「通信」の原野さんの論文や滝野さんの論文を参考にさせてもらっています。そうそう、ゲートにはやんばるの自然保護活動を担う人たちも多く、伊武岳や与那覇岳の山歩きにも連れて行ってもらいました。(毛利 孝雄)

## ◇読者からのおたより◇

「北の大地」へ 通信、勉強になります。原稿を使用していただきありがとうございました。次号での「おたより」にも書かれていてありがたいと思いました。六月の北海道まわりの件です。六月二四日から二六日でいかがでしょうか。

編集部より 六月二四日から二泊三日を予定しましょう。安い切符をYさんにお願いました。四人くらいかな。あなたと私と、他二人募りましょう。予算決定ししだいに。

ひどいJR 本誌1144号の新型車両の問題で、設計の段階から既に、最低限の基準を適用するなど、JRの人権感覚自体が「最低限」という事を暴露しているようなものです。どこの責任なのでしょうか？今からでも「望ましい整備基準」に改めさせる為には、責任追及が不可欠だと思います。詰まるところは取締役会でしようが。運輸車両部かな？ こういう事に組合が役にたたず、一社会もないのは残念ですね。他の鉄道会社が「望ましい整備基準」を既に実行しているのですね。他社に出来ることが、なぜJRにできないのか？理由を説明して欲しいですね。(東京・梅)

編集部より さつそくのご意見ありがとうございます。ご活躍を祈ります。

映画「いのちを楽しむ」ビデオプレスの佐々木さんからは五月の試写会案内を貰ったのですが、戻れそうもなく残念に思っていました。六月から劇場公開とのこと嬉しく拝受しました。(沖縄・M) 編集部より 東京では渋谷の「シアター・イメージフォーラム」で六月一日〜三週間、連日午前十一時〜、大阪の「シネヌーヴォX」では六月十五日、神戸の「元町映画館」では八月公開予定と。詳しくは「いのちを楽しむ」ホームページで「覧下さる」<http://www.inochiyoko.com/>

回転率 回転寿司屋さんの話ではありません。病院の話です。過日、「日本の医療の現状」と題した労働組合の学習会での講演で、今は、医療を受ける側も大変だが、病院もわが協会病院のように「急性期」と言われる病院では入院期間が長くなると収入が通減していくシステムになっている。病院はなるべく早く退院させるか「慢性期病院」に転院させるとの事。つまり、患者さんを入れ替える、回転させていかなければ経営が成り立たないような事になっているとの事です。その昔は、喫茶店などの飲食店ではよく回転率という言葉を目にしましたが、今では病院でもそういう状況となつていきます。診療や治療に関わっても、ちょっとした物でも使い捨て(ディスプレイ)になったり、とにかく経費のかかる現状のようです。(みんな)

編集部より 「回転率」、資本の諺「時は金なり」なんです。それが病院経営にも。悲しい。ドン・キホーテ 三月中は『ドン・キホーテ』(岩波文庫)に夢中になっておりました。バルザックからのつながりですが、ここまで面白い本は久しぶりです。チェ・ゲバラという人はこれを六回以上読んだそうです。英文を読んでいると quixotic (空想的な) という単語がよく出てくるのですが、自分の信条に忠実に勇気をもって難問に立ち向かうというのが、ドン・キホーテという人の本来の姿のようです。(東京・H)

編集部より ドン・キホーテ、バルザックおもしろい。セルバンテス、岩波文庫に短編集ある。これまたおもしろい。